



成人向  
コミック



落書きだらけの車内は、ホームと同じように人影はまばらだった。しかし、いかにも胡散臭いごろつきたちの集団が目につく。

そちらも舞に気付いたのか、遠慮のない視線を送りつけてくる。ウンザリとするが、乗ってしまった以上このまま行くしかない。舞は男たちの視線に気付かぬふりを決め込んだ。

しかし男たちはその態度がしゃくに障ったらしい。

舞の姿に情欲をそそられたのか、徐々にはやす声を高めていく。舞はそれも無視するが、男たちの嘲笑がやむことはなかった。

（治安が悪いっていう噂は本当だったのね。）

よりによって、あんな奴らに目を付けられるなんて最悪だわ）

見ればなかなか屈強そうな男たちではあったが、

キングオブファイターズに参戦できるほどではない。

もしなにかあっても、自分ならば軽くないなすことができるだろう。

しかしこれからすぐに次の試合がある身としては、

なるべく面倒ごとを起こしたくはない。

こちらから余計な手出しをしなければ何ことも起きないだろうと

そのまま無視を続ける舞。

そんな舞に、男たちは聞こえよがしな揶揄を送る。

見ろよあの脚、むちむちでたまらねえ。

尻も見えてるぜ、ありゃあ間違いない誘ってやがる。

俺はあのデカイ胸を揉みまくりたいな。

俺たちに犯されるために来たに違いない。

あんな挑発的な女、見たことないぜ。


好き勝手な妄想をする男たち。

その下卑た言葉に、まるで耳から犯されているような気分になる。

不快な怖気が背筋を走った。

（面倒臭いわね。でも、もうしばらくの辛抱だわ）

しかし、目的地まではまだかなりの距離があった。



ひよっとしたら  
こうなるかとは  
思ってたけど…

どっしり…  
腰が  
おしじまくなーい…

舞はふと、男たちとの距離が縮まっていることに気が付いた。自分が無視しているのをいいことに、

男たちが少しずつ近寄ってきていたらしい。

その集団からついに、1人の男が歩み寄ってくる。

そして男は、半分ほどが剥き出しになった尻に手を伸ばしてきた。

そろりと撫でられたこそばゆさで、舞は思わず息を呑んでしまう。

(なによこいつ。痴漢?)

やや遠慮がちに触れてくる男。

そのきこちなさがくすぐったく、舞は笑いそうになってしまう。

それもおかしな話だ。笑いを堪え、眉間にシワを寄せた。

しかし男は舞の態度などお構いなしに、ひたすら尻を撫で続けた。

あえてくすぐろうというわけでもなく、

またあからさまに掴みかかってくるわけでもない。

尻のふくらみに沿って手のひらを這わせてくるばかり。

右の尻を、そして左の尻を交互にさする。

尻の谷間に指を滑らせることもなく、他に手を伸ばすでもない。

舞は尻にキュツと力を入れ、こそばゆさに耐える。

それが男を調子付かせることになるとも気付かず。

男はひたすら尻をまさぐり続けていた。

ただ撫でさするだけの行為がどうして楽しいのかが分からない。

だからといって撫でられる感触を楽しむ趣味もない。

次の対戦相手やその後の戦いに思いをはせることで、

舞は不愉快さを忘れようと努力していた。

戦いをイメージすることで、

この痴漢行為も戦いの一部であると自分に言い聞かせる。

集中することで不快な感触は薄まり、


他の男たちの擲楯も耳に入らなくなっていく。

それは舞にとって間違った方法になってしまうのだが、

この時にはまだそれと気付けない。

ただ騒ぎにしたくないという思いばかりが勝り、

男の情欲を軽んじてしまった。



ちよっ…  
いくらお尻が  
出てるからって…

(あれ? なんだか、変な感じが……)

それまで、たださすっっているだけだったはずの男の動きに変化が出ていた。手のひらを擦るようになっていただけだったのが、もそもそと轟く感じになる。まるで芋虫が這っているかのような不快感に、舞はそつと息を呑んだ。

(こいつ、無抵抗なのをいいことに調子に乗って!)  
次第に指の動きが明確になっていく。

尻の肉を確かめるように揉み、そして掴む。

徐々に力が入ってくる指先の感触が気に入らない。

しかし不愉快であるはずのその動きが、

何故か甘い痺れをもたらすように思えてしまった。

(このくらいならまだ耐えられる。騒ぎを大きくしたくないしな)

舞は、また無視を決め込んだ。

それに気付いたのか、男は遠慮なく愛撫を続ける。

その指がするりと谷間に滑り込む。

わざとくすぐるように割れ目を撫でる指先を、

無視し続けることができなかった。

「んっ……く」

喉の奥からおかしな声が上がった。

慌ててそれを押さえ込むも、男には聞かれてしまっただろう。

くくつとわざとらしい含み笑いが聞こえ、舞は怒りと羞恥に身を震わせた。

驚愕みにした尻肉を揺らして遊んだり、軽くつねるようにもしてくる。

男の嘲笑が聞こえてきた。

尻をまさぐるだけでは飽き足らなくなったのか、耳に息を吹きかけてくる。

生温い息が気色悪く、舞は体を震わせた。

それを官能の震えと取ったのか、男は更に指の動きを強めてくる。

男はきつと、どこをどのようにならばいいのかわかっているのだろう。

執拗に肛門を攻め続けたかと思えば、

舞が怒りの声をあげないタイミングを見計らって手を離す。

尻肉をつまみ、痛みに感じてしまうギリギリのラインで力を緩めた。

そして、痴漢としての巧みな愛撫が本領を発揮し始める。



「俺の愛撫はどうだ？ 気持ち良くて身を委ねたくなるだろう」

男が甘く囁いてきた。しかし舞にとってそれは、不快な響きでしかない。服の上からとはいえ、肛門をまさぐられ続けるのことも不愉快だった。

くすぐったさを通り越したそれが官能であると、舞はまだ気付いていない。しかし体の方はそれを理解して、女性としての反応を示し始める。

「あれ？ なんだか、股間がヌルヌルしてる？」

股を閉じると、股間が湿っているのが分かった。

「そんな！ 私がこんな奴らに気持ち良くさせられてるっていうの！？」

これ以上続けさせることは許すことはできなくなった。

「そもそも、どうしてこんなことを許してしまったのかしら！」

一度怒りのスイッチが入ってしまったえば、もうためらうことなどない。すうっと息を呑み、丹田に気を込める。

そして油断したままの男のみぞおちに、鋭い肘を突き入れた。

「げふっ！？」

腹を突かれた男はなすすべもなく膝をついた。

気絶していないのが幸いというほどの打撃。

「調子に乗るからそうなるのよ。さっさと消えなさい」

しかし遠巻きに見ていた男の1人が、納得したような声をあげた。

「そうか。こいつ、マイ・シラヌイだ」

「なるほど、どうりで強いわけだぜ」

「だけど……なあ」

舞の正体を知って尚、男たちはたじろがなかった。

それどころか更に嘲笑を強め、ゆっくりと舞を取り囲む。

「全員叩きのめして欲しいの？」

「おっと、あんまり人目のあるところで」

騒ぎを起こさない方がいいんじゃないのか？」

分かったような口をきく男たちに、舞は怒りの視線を突きつけた。

しかしそれでひるむ痴漢たちではない。

すぐに舞の背後を取り、またも尻をまさぐり始めた。



こころしひら…  
ちよこしと踊り子に  
のこりかゝる…

今度は2人がかりで触ってくる。

(こいつら、本当に慣れてる。

ただの痴漢だからって甘く見ちゃいけないかも…)

男たちは位置取りも巧みに、舞への愛撫を続行する。

2人がかりで左右の尻を別々にまさぐる。

少しすると尻肉を揉んでいた方の手が太ももまで伸び、

優しくマッサージするように撫で回す。

そんな息の合った愛撫に、舞は思わずうめいてしまった。

甘い痺れが、全身を駆け巡っていくような気がする。

気付けばもう、股間はぐっしよりと濡れているようだった。

腰をひねる度にぬめぬめとした感触が陰唇をくすぐる。

「うっとりとしてるみたいじゃないか。」

「このままおとなしくしてれば、もっと良くしてやるぜ」

淫らなささやきが耳を犯す。

尻からの痺れと体内で合わさり、下腹部を熱くしていく。

(駄目だわ。これ以上、許しておくワケにはいかない)

肘を振りかぶる。

しかし男たちははすぐに察し、距離を取って避ける。

その隙にその場を離れようとするも、

もう片方の男に阻まれてしまう。

戸惑う舞の隙を突いて、男たちは更に愛撫の手を強くする。

尻肉を鷲掴みにし、強く揉みしだく。そしてついに、

下着の中に指を滑り込ませてきた。

男の指が直接尻の谷間を滑る。舞はあられもなく息を呑んだ。

その声の艶めかしさに、まず自分が驚いてしまう。

(なに、今の声…！私がかんなおかしな声を出すなんて！)

男たちに怒りを与えるより、自分の情けなさに腹が立った。

他の誰も触ったことのない場所に触れられたことが、


舞を強く動揺させた。

肛門をまさぐる指が、強く押し込まれる。

慌てて尻に力を入れて、指の侵入を防いだ。

これならば腹を殴られる方がましかもしれない。

初めての性的な攻撃に、舞は自分を見失う。



肛門のシワヒダを一本ずつ数えられているかのような恥辱に、舞は強烈な怒りをわき上がらせる。

太ももをさすっていた手が前の方にまで伸びてきた。下腹部に触れたその手の熱さが伝わり、愛液を温めていく気がする。溢れ出した愛液が下着から漏れ出し、内ももを伝ったところで舞は我に返った。  
(なにをしてるの私は！)  
ハッとして腰を引く。

人前だからと、試合前だからと遠慮していた怒りは、もはや頂点を越えている。このままでは次の試合にも差し障りが出てしまう。

舞は本気で気を練る。肘打ちが、ほぼ同時に左右の男たちの腹にめり込んだ。  
「ぐはあ！」「うぐっ！」

悲鳴をあげて倒れ込む男たち。

舞は勝ち誇ることもなく、その場を一步離れた。

そこでようやく、自分が息を荒げていることに気付く。

情けないことだと心の中で自分を叱咤し、また一步男たちから距離を取る。その時、膝がかくんと抜けた。

「なっ!?!」

思わず声をあげて、近くのバーを取る。

男たちがおかしな技を使ったわけでもない。

そう思った瞬間、不意に先ほどまでの試合が思い出された。

(まさか、さっきの相手に喰らった毒ガスが、)

今になつてきてきたっていうの!?!)

先ほどの対戦で相手の毒ガス攻撃にわずらわされたのだった。

(そんな。なんで今になつて……!?!よりにもよつて、こんな時に!)

フラフラとしている間に、男たちは立ち上がった。

舞の異変に気付いたようだが、それでもまだ距離を取って様子を見る。

「なあ、おい。おかしくないか?」

「あの女、やけにフラフラしてやがるぜ」

怪訝そうに見る男たち。しかし舞の不調が演技でないと見抜くや、

ニンマリと下卑た笑みを突き合わせる。

「どうやら、運が向いてきたみたいだな」

「こ、来ないで!」

あつという間に取り囲まれた舞は、

自らの不調を証明するかのように情けない声をあげてしまった。



その声を合図に、男たちはいつせいに喚いかけた。しかし体の自由が利かない。

戦いの素人たちにさえ抗うことができない。あっさりと捕まり、抱きつかれる。

初手から激しく乳房を鷲掴みにされた。

ジンとした痺れは、決して快感などではないと自分に言い聞かせる。男たちは自分たちの勝利を確信しているようだった。

（なんてことなの！ こんな失態、自分自身が情けない！）

これまでのように恐る恐る触れることなく、派手な愛撫で攻め立てる。胸を、股間を、首筋や脇、脚までも撫でさすり、時に吸い付いていた。

「は、離さない！ 私がかんなコトを許すと思ってるの！？」

「イヤなら抵抗すればいいじゃないか。」

逃げないなら、同意の上でコトだろう？」

男たちは舞の状況を把握したらしい。

体の自由が利かないのをいいことに、

自分たちの勝手な言い分を突きつけて笑う。

地下鉄を使うのはやはり失敗だった。今になって悔やんでも遅い。

屈辱にまみれることになってしまう。

（そんなこと、絶対にさせないんだから！）

今はまず羞恥を捨てなければ。戦いにおいては、男も女もない。

そんなこと、格闘家である自分はどうに知っているはず。

乳房をさらけ出されようとも、恥じ入っている余裕などない。

「くっ！ このおっ！」

比較的自由な脚を振り上げ、太ももをまさぐる男に膝蹴りを喰らわせる。

しかしタメのない蹴りなど大したダメージにもならない。

男はニンマリとした顔を見せつけ、太ももに抱きついて舐め始めた。

唾液をなすり付けながら舐める男。

わざとらしくジュルジュルと唾液を鳴らす下品さに怖気が走る。

そして内ももにまで舌を這わせつつ、徐々に上にあがってくる。

脚の付け根を舐められると、怖気よりも官能の痺れが走った。

気色悪いはずの男の舌が、艶めかしい官能を生み出してくる。

首を振り、丹田に気を込めてまた蹴りを繰り出す。

兇戯に等しいその攻撃に、男たちはそろって冷やかしの笑いをあげた。



くっ…  
こいつら  
好き放題  
もみやがって……

ふふふ

んっ…

毛汁

毛汁

毛汁

毛汁

まったく力の入らない舞を、男たちは存分に踊っていた。背後から抱きしめるようにして乳房を弄ばれる。やはり最初は強く、乳首をつまんだ。押し潰すようにつねられると、強烈な痺れが生み出される。それはすぐに乳房全体を痺れさせ、全身にまで巡っていく。それは舞にとって初めての感触で、どうしても喘ぎを抑えることができなかった。（なにこれ！ こんな変な痺れ、感じたことない！）快感が全身を痺れさせ、羞恥を官能へと変えていく。怒りはまだあった。しかしそれは衝撃的な痺れになって、全身を満たしていくばかり。男の愛撫に、舞の体はすでに強い反応を見せるようになっていた。（このままじゃ、本当にこいつらの好き勝手にされちゃう！）すでに好き勝手体中をまさぐられている。乳房のみならず、他の男には股間を愛撫され続けていた。男の指は、1本1本が意識を持っているかのように蠢いていた。閉じた股に潜り込み、内ももを掻き分けて谷間に滑り込んでくる。そのうねうねとした感触は薄気味悪く、怖気をもたらす。しかしそれ以上にソクソクとしたこそばゆさを生み出していた。それが官能なのだとは知らない。認めるわけにはいかない。舞は体に鞭を打って、股間への侵入を防ごうと脚を閉じる。しかし男は力尽くで攻め入ってきた。柔らかな内ももを撫で、揉みほぐしながら進んでくる。指はあっさり股の間に入り込み、まだ誰にも触れさせたことのない秘部へと到達した。先ほどまでの愛撫で十分に潤っていた女性器が、新たな刺激に股愛液を流し始めた。（こんなところ、触らせていいはずがないのに！）しかもこんな奴らにまさぐられるなんて、悔しすぎる！）屈辱感が舞の心に大きなダメージを与えた。それは次第に心の弱さへとつながり、心も体も疲弊させていく。

結構  
抵抗してきた  
みたいだけど  
ここまでだな

ああ、そんな……  
これじゃもう  
簡単には  
逃げられない……

いい格好だな  
そのデカイ乳が  
そそるぜ

心の隙を突かれた舞は、つり革に拘束されてしまった。大の字に開いた体は、もはや男たちの餌食だった。それだけでは足りないのか、男の一人がクスリを取り出した。抵抗する間もなくクスリが使われ、更に脱力してしまう舞。(ああ、そんな……これじゃもう、簡単には逃げられない!) 「いい格好だな。そのデカイ乳がそそるぜ」 男たちは笑みを少しも崩すことなく、またも舞に群がった。がつつくことなく、舞の体の隅々まで味わおうとしてくる。男たちの興味は特にたふたふとした巨乳に注がれていた。左右から別々の男が乳房に触れ、揉み込んでくる。その張りを、柔らかさを存分に堪能する。揉み上げたり、押し潰したり、ゆっくりと撫で回す。「んあああ! そ、それは駄目! そこは、弱いっ!」 指先でつつき、円を描くように転がす。じわじわとした官能が乳房全体に広がった。もう片方の乳房を弄る男も負けじと激しく愛撫する。焦らしに耐える舞に、男は満足げな笑みを見せつける。そして、勃起した乳首に吸い付いた。「きやあああああ! ああ、いや。それも駄目、駄目なのっ!」 焦らされた上に来た鋭い刺激に、舞は叫声を堪えきれなかった。脳天を突き刺すような官能は、舞の体に別の異変ももたらす。それは、軽い絶頂だった。性感の頂点を知らない舞は、それがなんなのかも分からない。だが、甘い満足感があった。気持ちいいものだ、と思ってしまう。しかしそれを認めるわけにはいかない。舞は羞恥と憎悪に心を焼きながら、反撃のチャンスはないものかと伺う。だが反撃どころか拘束から逃れることもできはしない。更に、先ほど使われたクスリが体全体に回ってくるのを感じていた。(体中が痺れてきて……触られただけで、ピクツてなり始めてる!) 男たちの手が腰に回った。尻を撫で回され、乳房と同じように鷺掴みにされ、揉み込まれる。もはや、脚をぎゅゅと閉じる力さえもない。舞はついに、女性器までをも鷺掴みにされた。



舞の下腹部に男の手が伸びる。

がっしりと鷲掴みにされ、大陰唇をこね回された。

「そこは、そこはっ……ああああああ！」

快感が脳天を突き、目の奥に火花を散らせた。

それは痛みではない。官能だ。

「なんだよこいつ、もうくちよくちよに満らしてやがるぜ」

「もう準備万端ってワケだ。」

待ってろよ、すぐにしたっぷりとブチ込んでやるぜ」

言いながらも、男たちは焦ることなく愛撫を続ける。

股間や尻を弄り回しながら、乳首にまで吸い付いた。

舞は自分の意志とは無関係に、体をビクビクと跳ね回す。

（こんなの知らない！ こんなのダメージ、受けたことない！）

乳首を甘噛みされて痺れる。

歯で乳輪ごとしごかれると、驚くような快感が生まれた。

敏感になっていくせいでろう、

舞はまた、それだけで体を弾けさせる。

それでも男は容赦せず、そのまま乳首を吸い上げた。

そうして両方の乳房をそれぞれに弄ばれながら、

更に秘部をこね回される。

ぐっちよぐっちよと淫らな水音が響いていた。

外に聞こえるほどに濡れた陰部は、もうドロドロ口に溶けきっている。

衣服を剥がれ、剥き出しにされた女性器から

大量の愛液がしたり落ちていた。

男の指が媚肉に触れると、じんわりとした感触がある。

ねちよつと淫らな水音が響き、舞はゴクリと息を呑んだ。

「駄目。そんなところ、直接触られたら……」

あ、あ、あああああああ！！」

ぐちゆり、と粘液が捏ねられる水音が響いた。

同時に強い官能がヴァギナから生み出され、脳天を突く。

男はまず手のひら全体で陰部を揉み込んできた。

小陰唇の肉ヒタが首の子手のひらに擦られてピラピラと開いていく。

少し前まで皮を被っていたはずのクリトリスも、

容赦なくひん剥かれて敏感すぎる突起をさらけ出す。



「……な、なに？ いや、やめて……なによ、それ！？」  
男は小道具を取り出して舞に見せつけた。

それがパイプレーターであるなどは知らない舞だが、  
どのようなに使われるのかは察しが付いた。

「お楽しみはこれからだせ」  
そしてパイプが低い唸りを上げる。

微振動するそれが、まずはクリトリスに触れた。  
「ひいひいひい！！ なにこれっ、なんなのっ！！」

舞は頭を思い切り殴られたかのような衝撃に震われ、  
初めて強い絶頂を経験した。

（すくくイヤなのに、すくすぎるくらい気持ちいい！）  
全身が弛緩する。

しかし倒れることもできず、快感を与えられ続けた。  
他の男たちもパイプを取り出し、体中に押し当ててくる。

特に乳首に当てられると、またすぐに絶頂した。  
体中に衝撃が走り、痙攣に似た痺れを起こす。

ビクビクと跳ね回る身体は、  
もはや完全に自分ではコントロールできなくなっている。

声をあげることでもできずうめくだけの舞に、  
男たちは容赦なくパイプを押し当て続けた。

両方の乳首を、クリトリスを同時に攻められ、  
舞は一瞬意識を失う。

しかしまたすぐ、快感に呼び起こされた。  
男性器に似た長いパイプが、膣内にヌルリと挿入される。

そこに抵抗はまったたくなく、  
むしろ呑み込んでいくような様子に男たちは歓喜する。

「ははは、パイプを咥え込んで膣を振り始めたせ！」  
「おお、すげえ締まりだ。」

「これだけ濡れてるのに、強く押し込まなきゃ入らないぜ」  
容赦なくパイプを膣に押し込まれる。

微振動するそれが膣内を痺れさせ、  
舞に新たな性感を与えていた。



（体の中が痺れてる！ 体の中も、外も、痺れすぎてる！）  
膣を犯すパイプからも、快感だけが生み出されていた。

初めての挿入なのに違和感はなく、  
絶対的な官能ばかりがわき上がる。

それが幸運だなどとは思わないが、

体は快樂の幸せを貪っているように思えてならない。

未開発で敏感な微肉を見知らぬ男たちに見られ、

こね回されている。

その屈辱はもはや言葉にならないほど。

しかし怒りの震えは快樂の震えと交わり、

羞恥はそれ自体が官能を生み出す情動と化している。

ヴァギナを弄ばれ、

尻の穴まで男たちの遊び道具になっている状態では、

もうこれ以上の屈辱などありえないと思えた。

ならばあとは上がるだけ。

反撃して自分を取り戻すだけ。

そうと分かっているのに、体がついてこない。

いっそ心が折れてしまえば楽になれたかもしれない。

失神してしまえば逃れられたかもしれない。

しかし舞の心は屈しなかった。強靱な心が意識をとどめていた。

いや、もしかするとこの快感をもっと味わっていたいのだと、

体が求めているのかもしれない。

強靱な心とは裏腹に、体はもう快樂の虜になり始めていた。

くくくくつ、ついに潮まで噴き始めたぜ。

こいつ、何回イってやがるんだ

朦朧とし始めた頭に、男の下卑た笑いが響く。

舞はもう、大小合わせて10回を超える絶頂をむかえていた…。



ど……どうにも  
連れて  
いかれるの……!

イって  
敏感になつてるの……  
これ以上はっ!

グツタリとした舞を、男たちは地下鉄から降りした。意識が朦朧としてるものの、降ろされて運ばれていることは分かる。しかしまだ体は自由にならず、男たちのされるがまま。そして男たちは地下鉄を出て、大きな車に舞を押し込んだ。(駄目……私には試合があるのに……)

車は走り出し、動く艦となって舞をいずこかへと運ぶ。「あ、あなたたち……こんなコトして、ただで済むと思つてるの……?」力ない舞の抵抗に、男たちはニヤニヤと笑うばかり。せめてなじつてやろうと口を開く舞だったが、1人が楽しむように猿ぐつわをはめてきた。「おやおや、よく似合うじゃないか」

「これでもう、喘ぎ声しか出せないぜ?」ほら、もつと俺たちを悦ばせてくれよ」

「ほら、もつと俺たちが悦ばせてくれよ」

「またも愛撫が始まった。パイプでイカされすぎたせいかな、少しの愛撫でも体が反応してしまう。勃起したままの乳首は、男にとって絶好の遊び道具らしい。つまんだり引っ張ったりしては、うめく舞の反応を楽しむ。男たちのテクニクは巧みで、触るだけでしっかかりとした快感を生み出す。それを認めたくないと思う心と、受け入れたがつている体がまったく自分のことながら別の存在のように思えた。」

「マ○コもドロドロにとろけきつたままだな。」

ほら、こんなに簡単に、指を咥え込みやがる」

隙に指を潜り込ませ、中をかき混ぜながら舌なめずりする。パイプのような振動はないが、それよりも激しく動く指先にうめく舞。男はその太い指を、まるでベニスでそうするかのように出し入れする。ぐつちよぐつちよと卑猥な水音が響き、甘い痺れをいや増していく。誰にも触れさせたくないはずの隙内があっさりと蹂躪され、舞はまたも強い怒りを覚えた。

この怒りがある限り、こんな男たちに屈したりはしない。必ず反撃のチャンスをうかがうのだ。

(悔しい……けど、こんな奴らに、絶対に屈したりしないんだから!)

ダメ…  
敏感に  
なりすぎてる…!!

このデカイ乳が  
たまらないぜ

「このおっぱいは  
おっぱい  
……エロい……」

ん  
っ

おっぱい  
おっぱい

乳首もこんなに  
勃起しやがって  
エロすぎだろう

いつまで経っても、舞の体からガスの効果が抜けなかった。男たちに使われたクスリも相乗効果を出しているのだろう。その上、快感がある。舞の体は、すでに男たちに狂わされていた。「このデカイ乳がたまらないぜ。」

「乳首もこんなに勃起しやがって、エロすぎだろう」

キュツと尖った乳首にしゃぶり付きながら、男が官能の唸りを上げる。

様々な刺激が敏感な先端に襲いかかり、舞にも淫らな吐息を漏らさせる。

口枷をはめられて罵倒することもかなわず、ただ喘ぐばかりにさせられていることがまた屈辱的だった。別の男が、背後からうなじを舐め始めた。

ぞわぞわとする官能がわき上がり、またもうめく舞。首筋や耳にまでたっふりと唾液をなすり付けられる。眉間がツンとなるような感覚に見舞われ、軽い暈厥状態に陥った。その間にも男たちの愛撫は続いている。

乳房は片方ずつ別の男に弄られていた。

乳首を丹念にしゃぶっている男。

背後から鬚掴みにして揉みたくばかりの男。

それぞれが別の快感を生み、舞の心を落ち着かせない。「だいぶおとなしくなってきたな。そろそろ諦めたのか。」

「それでも、こんな奴らに屈したりしない！」

絶対に負けてなんかやらないんだから！

氣力を振り絞って男を睨み付ける。

しかし男は、それを待っていたのだと言わんばかりに破顔した。

いくら  
強いつていっても  
所詮 女だな

んんッ!!

毛汁毛汁

こんな奴らに  
いいように  
されるなんて……!

たつぷりと時間をかけて体中をまさぐられ続けている。ふかふかの大陰唇を揉み込み、両手で左右に押し広げる。赤く充血したヴァギナがぼつくりと開いて、女性器のすべてをさらけ出した。

男は足の指を呑み込むほどにしやぶりながら、愛液の滴るヴァギナをもてあそび続けている。

かと思えば、別の男は手の指に同じような行為をしていた。まるでアイスでも食べるかのように指をしやぶり、

時に甘噛みしたり、痛みのない程度に強く噛んだり……。指をしやぶられ、そのねっとりとした感触に耐え続ける。

我慢していることが焦らしに代わり、恐怖が淡い官能となる。敏感な指先を舐められ、そわそわとする痺れをわき上がらせた。

「なにがキングオブファイターズのマイ・シラヌイだ。いくら強いといつても、しよせん女じゃないか」

「そうだな。ちよつと抵抗の意欲を見せても、すぐに折れちまっちゃあ面白みがないぜ」

「抵抗する女をいたぶるのが楽しいつてのによ……!」

男たちの侮蔑に、また怒りを募らせるマイ。しかし、その気迫は愛撫によって霧散させられる。

これでは、男たちになにを言われても仕方がない。(違う。私は快樂に負けてるわけじゃない!)

卑怯なクスリやガスで、抵抗力を奪われていて……) 心の中で自己弁護する。

それがもう心が弱まっていて証拠なのだと、舞はまだ気付いていない。

いや、気付きたくなかったのかもしれない。体の隅々まで愛撫をし尽くして満足したのか、

男たちの手がまた性感帯に伸び始める。より強く勃起させた首をつまんではニヤニヤと笑う。下着部分を引っ張って股間の割れ目を攻め立てる。

ただ脱ぐよりも卑猥な姿になったマイを見て、男たちは歓喜の声をあげた。









さあ  
ここからが  
本番だぜ？

くっ！  
み…身動きが  
とれないっ！

このままじゃ私  
犯されるー！

次に目を覚ましたのは、ベッドの上だった。口枷は外されていたが、今度は手足を拘束されている。右手と右足、左手と左足がつかながれ、

これまでになくあらゆる格好を強要されている。

「ま、またなにかしようって言うの……これ以上は、もう！」  
弱々しい抵抗の言葉さえ潰そうというのか、男が頭を押さえ付けた。平伏させられているかのような姿勢に、強い屈辱感がある。抵抗を試みるが、やはり身動きは取れない。

意識としては動ける状態である今の方が、

先ほどまでの弛緩状態よりも一層屈辱的だった。

「いい格好だ。これがあのマイ・シラヌイだとはな。

いきがってても、しよせんはただの女だぜ」

「裸にしちまえば、女なんて誰でも一緒さ。」

「チ○ポ欲しさにケツを振るだけだろう」

「わ……私は、そんなもの欲しがったりしないわ！」

わざとらしく淫らな言葉を吐きかけてくる男たち。

そうして舞の抵抗心をあおっているのだと分かっていても、

反論しないわけにはいかない。

「マ○コ剥き出しにして偉そうに口答えするんじゃないやねえよ」

「見ろ。こんなにグチヨグチヨに濡らして、

今すぐブチ込んでもらいたいわってヨダレを垂らしてるじゃねえか」  
男の手がヴァキナに触れた。

言われた通り、ぬちよつとした愛液の感触がある。

あれだけイカされても尚、体は性の快楽を求めているというのか。

こんなころつきたちにいいように体を弄ばれているのに、

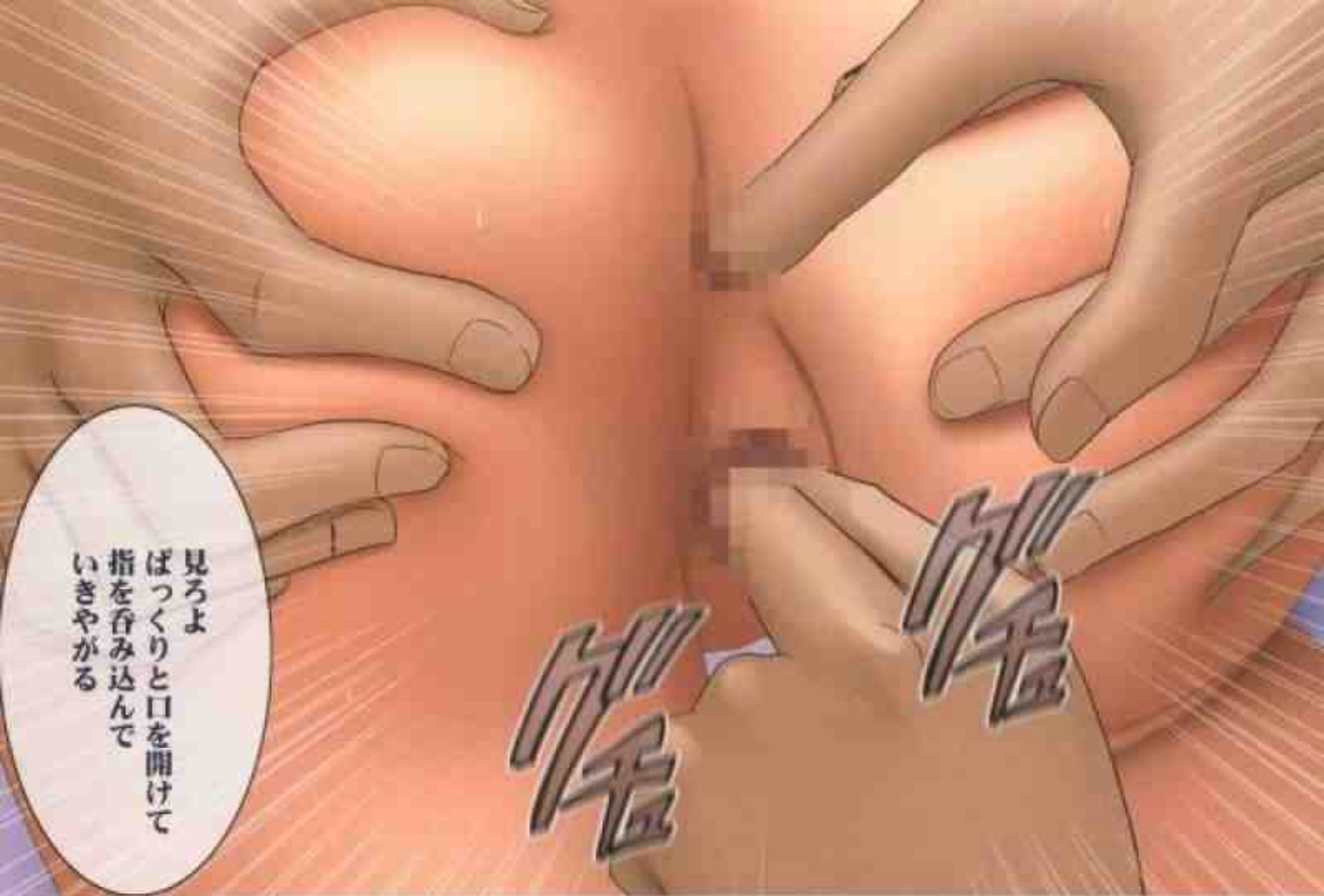
どうして体は反応してしまっているというのか。

（まだクスリは効いてるのかも。）

「そうじゃなきゃ、こんなに濡れてるわけがない！」

意識を失っている間に、また別のクスリを盛られたのかもしれない。

そういう卑怯な男たちには、やはり屈服するわけにはいかなかった。



見ろよ  
ばつくりと口を開けて  
指を呑み込んで  
いきやがる

しかし舞の怒りは、男たちにとっての興奮剤代わりだった。その目に抵抗の意志があると見て、男たちはまた体中をまさぐり始める。特にこの格好だからか、弄りやすい股間に集中された。

「見ろよ、ばつくりと口を開けて指を呑み込んで行きやがる」  
ごつごつとした太い指が膣壁を押し分けてめり込んで来る。

ぐちよぐちよと水音が立つようにかき混ぜ、膣壁を擦りつけた。何度も出し入れを繰り返しながら指をくねる。

腹の側、尻の側の膣壁は特に快感度合いが強く、歯を食いしばらなければすぐに喘いでしまいそうになる。

（我慢しなくちゃ！ 声を出したら、こいつらを悦ばせるだけ……）  
しかし体の素の反応には逆らえない。

膣内をかき混ぜる男の指が、クリトリスの裏側あたりを擦りつけた。その瞬間、舞は絶叫に近い喘ぎを漏らす。

「いや！？ なにこれ、なんなの、この凄いのっ！」

Gスポットを知らない舞は、男がにんまりとしたのに気が付かなかった。膣内でも特に敏感な位置を探り当てられ、指の腹でぐいぐいと押される。その強烈な快感の痺れに耐えきれず、舞はまた軽い絶頂を迎えた。

「おお、すげえ締め付けた。こりやあち○ポ入るのが楽しみだぜ」  
男はGスポットあたりを刺激し続ける。

絶え間なく襲い来る絶頂感に耐えながら、舞は必死に理性が飛ばないようにと気を強くしていた。

（耐えなきゃ！ こんなことくらい、耐えていなくちゃ！）  
土下座させられているような感覚は屈辱的だが、

ヴァギナを好き勝手にされる方がよほど腹立たしい。なんとか耐えていた舞に、更なる屈辱が襲いかかった。

「こつちの穴も今のうちにほくしておかないと」  
男の指が、肛門に触れた。

まさかと思う間もなく、そのまま尻の穴に指をねじ込まれた。痛みはなかった。愛液をたっぷり絡ませていたのだろう。

ぬるりと滑り込んだ指が、肛門内でうねうねと蠢く。

（こんなことあり得ない！ 絶対に許さないんだから！）  
膣どころか肛門まで弄くり回され、舞は理性さえ壊すほどの怒りを覚えた。

いい顔だ  
まだまだ心は  
折れてないってワケだ……

さすがは  
マイ・シラヌイと  
いったところだな

ほあ

ほあ

滑る滑る

あッ!!

あッ!!

さあ  
どこまで  
耐えられるのか  
見せてもらおうじゃ  
ないか

ガ  
ガ

「いい顔だ。まだまだ心は折れてないってワケだ……  
さすがはマイ・シラヌイとったところだな」  
男たちの愛撫に、激しさがなくなつた。

もちろんそれは体ませてやろうなどという心遣いではない。  
ゆつくりとした愛撫は続けられる。

男たちは、瞳も肛門もまださんさんに弄ぶ気満々の顔をしていた。  
「強い女を屈服させるのが面白いんだ。」

さあ、どこまで耐えられるのか、見せてもらおうじゃないか」  
それから数時間。舞はずっと性感帯を弄られ続けていた。

しかも先ほどまでとは違い、イキそうになると刺激を止められた。  
クリトリスを弄る手を、乳首をつまむ手を止められ、

絶頂に達しないようにコントロールされる。  
苦しくて辛くて、息継ぎがしたい……絶頂したい。

この強烈な性的欲求が男たちの目的なのだ知って、  
舞は目の前が真っ暗になる気がした。

（苦しい……辛い……頭がおかしくなりそう！）  
男の隙を突いてでも絶頂したい。

そうして息を呑む。しかし、男はその瞬間に手を離した。  
（ああ、そんな……そんな……っ！）

「どうした？ すいふんと物欲しそうな顔をしてるじゃないか」  
「どうなりたいんだ？ お願ひしてしろよ」

男たちの目的は、まさにそれだった。  
抵抗し続ける舞を見て楽しみ、その心が折れるのを待ちわびる。

その卑怯な手口に、舞はもはや理性の欠片のみで抵抗し続ける。  
そしてまた、クリトリスをつままれた。

あとほんの少し強くされれば、持ちに待った絶頂が来る。  
これまでためていた分、強烈な絶頂だろう。

また失神してしまうかもしれない。  
絶頂での失神は幸福に満ちたものだ、

舞はすでに知ってしまった。



あああ！

ダメッ！

もうダメッ！

もみもみ

男の指がクリトリスから離れ、また挿入するような笑いが起こる。そしてついに、ブツン、と緊張の糸が切れた。

「お願い！ お願いだから、もうイカせてえ！」

欲しがっただけでも軽くイキそうになった。

絶叫はアクメのスパイスなのかもしれない。

「お願い。もういいでしょう？ 早く、早くイカせて！」

「ずいぶんとワガママな女だな。」

お願いをきいてももらいたくないなら、それなりの代償が必要だろう？」

笑いを堪えながら乳房を激しく揉みしだく。

それも快楽ではあったが、絶頂を促すにはほど遠い。

性の虜になってしまった舞には、それは拷問とも言えた。

まるで子供のようにいやいやと首を振る舞。

それでも男は乳房に執着し、激しく揉み続ける。

乳首をつねられると、少し強い痺れが来た。

悦びを訴える舞を、更に高めてやろうと乳首を弄り倒す。

舞は乱暴にされることでソクソクしていた。

「お願い！ なんでもするからイカせて！ おま○こしてえ！」

そんな舞の言葉に、他の男たちは自らベニスを取り出していた。

初めて見るベニスはグロテスクだったが、

しかしやけに愛らしくも見える。

それをどのようにして使うのかくらい舞だって知っていたし、

今はただひたすらソレが欲しい。

「お願い！ ソレをちょうだい！」

私の中に入れて、おま○この中に入れていいから！」

快楽に心を許して待った舞は、もう自分がどれほど

淫らなことを言っているのかの自覚もない。

ひたすらに快楽を求める姿は、男たちの興奮をいや増した。







「俺はこっちがいいな。ほら、そのデカイ乳を使うんだよ！」  
大きなベニスが、大きな乳房に挟まった。

「デメエ、またふっかけたりするんじゃないぞ。」

ケラケラと笑いながらも、バイスリを手伝う他の男。

舞は自分がなにをされているのかよく分からず、

されるがままになっている。

（ああ、おち○ち○熱い……）

ビクビク脈打って、私の胸を犯してくる！」

「おお、さすがにデカくて気持ちいいぜ。」

こりやあ、すぐに出ちまうかもしれないな」

待ちわびるように龟头を眺める。

どす黒い肉棒の先端にある穴から、

あの濃厚な精が放たれるのだと思うと

居ても立ってもいられない気分になる。

そんな舞の思いを察したのか、腰の動きが速まった。

ずりずりと乳房の間を擦るベニスの熱さが増していく。

（ああ、来る。来るわ。精液が顔にかかる！）

しかしその期待は裏切られた。

男は腰の動きを緩め、また乳房の感触を楽しむように

ベニスを押し込む。

それに合わせて、乳房を押しさえる男が乳首をつねり始めた。

またじわじわとしたゆるい官能が焦燥感をあおる。

そうだ、イキたいのは自分であって、

男の絶頂が見たいわけではない。

射精は、それはそれでいいのだが、

やはりまずは自分の絶頂を楽しみたい。

まだなのか。いつまでベニスで愛撫され続けるのか。

舞は懇願するように男を見る。

その視線に気付いたのか、男は悪魔のように笑った。

「……いいぜ。そろそろくれてやる！」



初めて見る男性器のサイズに、舞は目の前が真っ暗になった。指などとはサイズが違う。

パイプと比べてもかなり大きい。

しかし男は遠慮することなく、開かれたままの舞の股間に割り込んだ。

愛液で濡れそぼったヴァギナは、

怒張したペニスを難なく最奥まで呑み込んだ。

入れてすぐ、ケダモノのように激しく腰を振り、

舞の膣内を蹂躞する。

最初は圧迫感のあった挿入だが、

性の興奮に満ちていたのは舞も同じ。

すぐにペニスから与えられる快感が膣内を満たし、

体中に快感の痺れを広げていく。

「ああ、これ熱い……ふ、太い！  
おま○こ、気持ちいい！ すこくいいのお！」



あああ  
あああ  
あああ

男がゆっくりと腰を突き上げた。

めりめりと突き上げられてくるベニスの感触に、舞はうっとりと喘ぐ。

その瞬間、背後からお尻を支えられた。

え？と振り向く間もなく、

肛門を突き破って直腸にベニスが押し込まれた。

「あつ……同時になんて、2本同時に突っ込むなんてえ！」  
強烈な圧迫感があった。

壁に収まっているベニスと、直腸に押し込まれたベニスが、体内の薄皮一枚隔てたところでぶつかる。

「ああ、そんな。来ちゃう、来ちゃうううう！」

2本挿しされて、イツちゃううううう！」

壁と直腸、それぞれの中を行き来するベニスの熱さに、舞は感動さえ覚えていた。

（すごい、すごすぎる！）

こんなの、気持ち良すぎておかしくなる！

その快楽は、待ちわびた甲斐があったといえた。

「おおおお、締まるっ、すげえ名器だ！」

「こんなの、すぐに出ちまうぜええ！」

壁と直腸を交互に行き来したり、同時に出し入れしたり。

舞はもう、理性の欠片もなく喘ぎまくっていた。

性の快楽に落ちてしまえば、

こんなにもあつさりと受け入れられる。

自分が女であること。快楽の虜であることを。

そして男たちの動きが高まるのを感じた。

射精が近い。膣内と腸内のベニスが熱く膨らむ。

破裂するのだ。

あのねっとり甘い精液を、体内に注がれるのだ。

それはもう、どんな幸福にも勝る官能。

舞はありったけの嬌声を絞り出し、男たちの絶頂を持った。

同時に自分も、果てしない絶頂を味わえるのだと信じて――